

小学校外国語活動の充実に向けたカリキュラム開発（2）

ーコミュニケーションの質を高める授業づくりー

土江 和世

Kazuyo Tsuchie

奈良教育大学大学院教育学研究科教職開発専攻

School of Professional Development in Education, Nara University of Education

1. はじめに

2008年小学校学習指導要領改訂で、小学校における外国語活動の必修化が決定し、2011年度より5、6年生で年間35時間実施されることになった。勤務校である川西小学校は、外国語活動の実施に関しては、授業時数は2008年度が0時間、2009年度は10～16時間と全体的にまだ少ない上に、学年・学級によりばらつきが見られる。学習指導要領で定められた基準時数に円滑に移行し、外国語活動の研究主題及び年間指導計画の作成に向けて校内で研修をする必要があると考える。

外国語活動の内容に関して、当初、文部科学省は、共通教材として『英語ノート』（2009）を作成し、移行期間からの使用を薦めたものの、ベネッセによる「小学校英語・拠点校の取り組みに関する調査」（2008）の結果にも表れているように、『英語ノート』には、「難易度」「評価の方法」「使いやすさ」などで課題があることがわかった。また、2009年11月、『英語ノート』は、政府行政刷新会議の事業仕分けの対象となり、一旦「廃止」とされたが、小学校外国語活動を進める上で必要不可欠との声が多く寄せられ、2010年において2011年度分を作成・配布することとしつつ、見直しが図られることとなった。

自身でも、2009年度の課題研究で『英語ノート』を考察した。そのことにより、小学校外国語活動を充実させるために考慮すべき観点として「地域の特色や児童の実態を生かしたもの」「質の高いコミュニケーション」「教科・領域横断的な指導」「異文化理解」の4つを挙げ、それらを基にして、5、6年生の年間35時間分のカリキュラムの開発を行った。実践例として、「小学校英語とそのコーディネーション」の授業の仕上げとして、本校児童が総合的な学習の時間に取り組んでいる地域文化である能を題材

に外国語活動の研究授業を行った。

2010年度は、作成したカリキュラムに基づいて授業実践をし、それらの効果について検証した。さらに、改善を図りながらより洗練されたカリキュラム及び授業を開発し、来年度からの勤務校の外国語活動の展開に備えたい。

2. 「教科・領域横断的な指導」の観点

学習指導要領による外国語活動では、目標を「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」としている。

金森(2009)は、小学校教育の目標は豊かな人間性の基本となる「知育・徳育・体育」の育成を目指すことであり、そのためには、教育課程のすべてを通じたクロスカリキュラ（教科横断的）な取り組みが望まれるとしている¹⁾。さらに、児童期の英語教育を、「人と関わるコミュニケーション能力の育成」のための機会ととらえ、他教科との関連において「人間教育」としてふさわしい活動内容を仕組んでいくことができるとしている。

川西小学校においても「人権尊重を基盤として基本的な知識と技能及び逞しい体力と豊かな感性を身につけた民主的な社会の形成者としての児童の育成を図る」という人間教育的な目標が定められている。それに基づき、筆者は、自身が担任をしている学級の目標を「認め合おう、支え合おう」と設定した。各教科・領域を通して、あるいは外国語活動及び教科・領域横断的な取り組みにより、児童のコミュニケーション能力を高め、学校目標及び学級目標にせまりたいと考えた。また、授業以外でも、毎日の「帰

りの会」に、自分がかんばったことや、友達の良いところの気付きなどを発表させることとした。図1はそのイメージである。

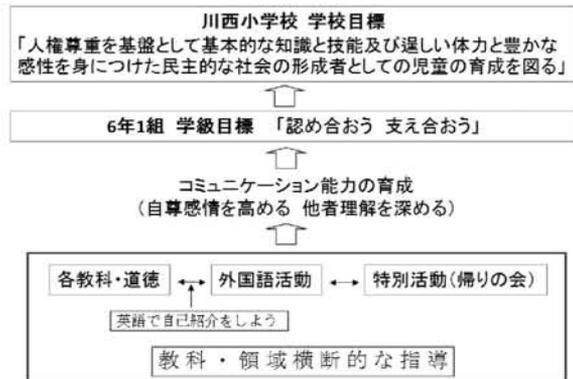


図1 単元と学校目標・学級目標との整合性

3. 「コミュニケーションの質を高める」観点

充実した小学校外国語活動を進める際に考慮しなければならない4つの観点の1つとして、「コミュニケーションの質を高める」ことを先に挙げた。単にゲームやチャンツだけではなく、自己表現の機会を持ち、「自尊心」を育て、「他者理解」の心を育む活動を大切にする必要があると考えた。

近年、「自尊感情」や「自己肯定感」と訳される「セルフ・エスティーム (self-esteem)」という概念が様々な教育の領域で注目されている。自尊感情の育成が注目される背景には、我が国の最近の子ども達が自分に自信を持つことができず、自立心が育っていないことや、人間関係が希薄で集団としてのつながりが弱いという状況が考えられる(高知県教育センター 2005) 2)。

河地(2003)はスウェーデン、アメリカ、中国、日本の中学3年生の子ども達約4000人を対象にした調査(「自立や自信に対する本調査」)を行った。調査項目の中の「自信」についての質問項目では、日本の子どもは、ほぼすべての項目で他国の子ども達と比べて低い値であったことを紹介している。さらに、「自分を誇れるもの」についての質問項目に対して、肯定的な回答をしたのは半数にも満たないとしている。日本の子ども達の多くが自分に満足せず、誇れず、価値ある人間であると思えないとの自己評価を下していることが分かる 3)。

「セルフ・エスティーム (self-esteem)」とは、人が持っている自尊心 (self-respect)、自己受容 (self-acceptance) などを含め、自分自身についての感じ方をさしている。自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚—感情である(遠藤1992) 4)。

これは、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことである。つまり、自身を「非常に

よい (very good)」と感ずることではなく、「これでもよい (good enough)」と感ずる程度が自尊感情の高さを示すと考えられ、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味する(ローゼンバーグ1965) 5)。

「セルフ・エスティーム」に関して、スーザン・ファウンテン(1990)は、健全なセルフ・エスティームはよい人間関係の基盤となるとし、自らを肯定的に見られる子どもは、他の人にも同様に肯定的な視点で捉えられるとしている。異なる集団に属する人々に対する敬意や平等といった意識が育つには、まず自らを価値あるものだと誇れる気持ちがなくてはならないとし、この自信が、新しいこと、論争的な問題、未知の考え方などにあえて挑戦しようとする態度を促すものであるとしている。さらに、自分に価値を認め、他人のそれをも正しく評価できる子どもは、差別や不平等を黙認するのではなく、不正に立ち向かっていくことができると述べている 6)。

以上のことにより、コミュニケーションの質を高めるためには、自分と違う価値観を理解し、受け入れ、他者を尊重しようとする態度を育成することが大切であるが、前提条件として、まず各自の自尊感情を養うことが必要であると言えよう。

4. 授業実践

以下、上記の二つの観点を考慮しながら計画、実践を行った「英語で自己紹介をしよう」の単元の詳細を述べる。

本単元は『英語ノート』2, lesson 4の「自分ができることを紹介しよう」を用いて展開をした。扱う表現は「I can ~」である。目標を、①外国語活動に意欲的に取り組み、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を養う(関心・意欲・態度) ②「can」「できる」という英語の表現に慣れ親しみ、英語で自己紹介ができる(技能・表現) ③英語表現に触れ、言葉の面白さや豊かさに気付く(言語や文化への気づき)と設定した。設定した単元目標を達成し、自分の伝えたいことを表現しようとするコミュニケーション能力の素地を育成するために、英語活動だけでなく、道徳『心のノート』—「自分自身向上プロジェクト」、理科「ヒトや動物のからだ」などを含めた教科・領域横断的な指導として取り組んだ。その都度、自分が「できること」を見つめ直し、自分らしさを発見させるきっかけとした。また、クラスの友だちに「できること」のメッセージを送ったり、友だちの発表を聞いたりすることにより、改めてその人のことを見直す機会となるようにした。さらに、発表の成就感を体得させることも各自の自尊感情を高めることになると思われる。

表1 英語活動の単元指導計画

時	主な活動
1	「英語ノート」2 Lesson 4「できることを紹介しよう」を用い、「I can～」の言い方を練習する。
2	絵本『What can you do?』を用い、自分ができることについて振り返る。
3	既習の表現「My name is～. I like～」と合わせて、自己紹介の文を考える。
4	自分の「名前」「できること」「好きなもの」を英語で表現し、自己紹介をする。 友だちの発表を聞く。
5	技能・表現面での評価（個別面談方式） 今回の学習活動で考えたことや学んだことをまとめる。

4.1. 活動計画

英語活動の単元指導計画は、表1の通りである。全5時間の主な活動を示している。

4.2. 各授業の評価、データ

第1時の授業後に児童に感想を書かせた。「意欲的に学習に参加することができましたか」という質問に対して、27名中、16名が「よくできた」、10名が「まあできた」、1名が「あまりできなかった」とし、「できなかった」と回答した児童はいなかった。

また、「～できるという英語での表現の仕方はわかりましたか」という質問に対して、22名が「よく分かった」とし、4名の児童が「まあ分かった」、1名が「あまりできなかった」とし、「できなかった」と回答した児童はいなかった。

第2時では、児童に感想（気付いたこと）を自由に記述させた。それらを設定した目標の内容に応じて「関心・意欲に関わること」「技能・表現に関わること」「言語や文化への気付き」「自分ができること（自尊感情）」に分けてまとめた。

「関心・意欲に関わること」では、英語を使ったり、新しいことを学んだりすることに対して意欲的に取り組む姿勢が見られた。「技能・表現に関わること」では、いろいろな例文を比較しながら提示することにより、「can」の後には動詞がくることなどに気づく児童が見られた。そのことは、授業中に既習の動詞を使って、「I can～」を用いて表現しようとしてできていたことから伺える。また、「言語や文化への気付き」では、同じ絵カードで違う表現をする（「soccer」と「football」）ことがあることを示すことにより、英語には「方言」のようにいろいろな言い方があることに気づくことができた。さらに、「自分ができること（自尊感情）」に関しては、「みんなが学校でいろいろなことができることがわかった」「みんなの良いところを見つけたい」などの感想が見られた。以下に実際の児童の感想を示す。

児童の感想（気付いたこと）

関心・意欲に関わること

- ・ いろいろなことを学んで楽しかった。
- ・ 「I can～」という話し方や「the」「play」などのつくときが分かってうれしかったです。
- ・ 英語も日本語も伝えたい事とか気持ちはちゃんと伝わるんだなと思った。
- ・ 初めて知った言葉があつて勉強になった。これから使おうと思った。

技能・表現に関わること

- ・ 「I can」の後に動詞がくること
- ・ 「uni」は1つのということが分かった。
- ・ 「できる」ことの言い方が分かった。
- ・ 「I can～」を覚えることができた。また、使うことができた。
- ・ 発音の仕方が分かって楽しかった。

言語への気付き

- ・ 国によって言い方が違うのがある。
- ・ 楽器など音の出るものには「the」をつけること
- ・ 日本でできたものは「ななめ」に書く。
- ・ 英語にはいろいろな言い方があって英語にも「方言」というのがあるんだなと思いました。

「できること（自尊感情）」に関して

- ・ 学校でできることが、思ったよりいっぱいあった。
- ・ みんなは何ができるか分かった。これからもみんなの良いところを見つけたい。
- ・ きょうの勉強でみんなが学校でいろいろなことができることがわかった。

第3時では、子ども達は、「自分が学校でできること」についていろいろ考えることができた。「一輪車をかたづけすること」「ウサギにえさをやること」「友達に親切にすること」「校内放送をすること」など、内容は多種多様であったが、自分が表現したいことを和英辞典やインターネットを使って英語に直そうとした。外国語活動をし始めてまだ間もない児童にとっては難しい作業だったようだが、それぞれ

が熱心に取り組むことができた。本時だけで完成させることができなかつた児童に対しては個別に援助をし、全員が自己紹介文としてまとめることができた。以下にその一覧を示す。

「英語で自己紹介をしよう」
「自分ができること」

I can play soccer. I can play go. I can write well. I can make my friends happy. I can sing well. I can make an announcement through PA system. I can read many books. I can make pictures well. I can use a computer. I can walk on stilts. I am good at karate. I can make my classmates laugh. I can play the piano. I can play video games. I can play badminton. I can speak English. I can use a dictionary well. I am good at history. I can play dodge ball. I can be kind to friends. I can feed the rabbits. I can play the fife. I can make origami well. I can Hula-hoop. I can study very hard. I can read books well. I can dance well.

「自分の好きなもの」

I like animals. I like video games. I like soccer. (2名) I like my family. I like drawing (painting) pictures. I like books. I like badminton. I like strawberries. I like entertaining. I like my grandmother. I like my dog. I like my mother. I like comics. I like my friends. (2名) I like my mother and sister. I like baseball. I like samurai. I like my family and my friends. I like sports. I like swimming. I like my sister. I like dram and fife band. I like books. I like dogs. I like tennis.

第4時は授業参観日であった。子ども達は保護者や級友の前で、自分の「名前」「できること」「好きなもの」を英語で表現しながら自己紹介をすることができた。ただ単に「パターンプラクティス(与えられた選択肢から選んで文を作るような機械的な発話)」として英語で直接的に表現したのではなく、自分が伝えたいことを表現しようとする「コミュニケーション能力の素地」を育成することにつながる活動ができたと考える。さらに、教科・領域横断的な取り組みで「気付いたこと」や「これからがんばりたいこと」などを日本語で付け加えて発表することができた。以下にその例を示す。

「気付いたこと」

- ・自分の大切さ、人の大切さに気づきました。

- ・自分のできることとか、良いところが意外にたくさんあるということ。
 - ・一人一人のよいところや、できることが分かった。
 - ・自分には自信を持てるところがある。
 - ・友だちからいろいろなメッセージをもらってうれしかった。自分のよいところが分かった。
 - ・みんなの良いところは人それぞれで、自分らしさも大切にしないといけないこと。など
- 「これからがんばりたいこと」
- ・もっと友達と仲良くしていきたい。
 - ・自分ができることをもっと増やしていきたい。
 - ・友達との絆を深める。
 - ・クラスをもっと楽しくする。
 - ・自分と人の良いところをもっと見つける。
 - ・自分に自信を持つ。
 - ・いろいろな人のことを認めたい。
 - ・いろいろなことに挑戦したい。
 - ・元気いっぱいいろいろなことに取り組みたい。
 - ・自分らしさを大切にしたい。など

授業終了後の感想には、「うまく発表できてよかった」「緊張したが、頑張って発表できた」「みんな上手に発表していた」などの感想が見られ、それぞれが成就感を味わうことができたようである。

第5時では、「can」『できる』という英語の表現に慣れ親しみ、自己紹介ができる」という技能・表現面での評価を本学の吉村教授、教職大学院生の奥山氏による個別面談方式で行った。評価は、自分の「名前」「好きなもの」と「できること」の一つを、英語を使って正しい文法と発音で表現することができた際には基準点の6点が与えられる。表2に評価の例を示す。

表2 評価の例

記号	1点		1点		2点		2点		2点		2点		合計得点
	名前	好きなもの											
1	名前	好きなもの	4										
2	名前	好きなもの	10										

ほとんどの児童が、自分の「名前」「好きなもの」と「できること」を少なくとも1つは英語で表現して自己紹介をすることができた。発音において不十分な児童は基準点に達していないが、「できること」を2つ言えた児童が2名、3つ言えた児童が1名いた。

基準点6点に対して平均が5.54点になったことから、技能・表現面においては概ねねらいに到達したと考えられる。

5. 成果と課題

5.1. アンケート調査結果

単元の初め（5月27日）と終わり（6月24日）にアンケート調査を実施した。その調査結果から、成果と課題について考察する。

アンケート

これからの外国語活動をできるだけ充実したものにしていきたいと思っておりますので、アンケートに協力して下さい。

（よく当てはまる 4 まあ当てはまる 3
あまり当てはまらない 2 全く当てはまらない 1）

外国語活動に関して

（1）これまでのクラスでの英語の授業は楽しかったですか。

単元学習前では、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」とする児童が若干いたが、学習後では全員が「よく当てはまる」「まあ当てはまる」とし、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の負の評価をする児童がいなくなった（図2 参照）。

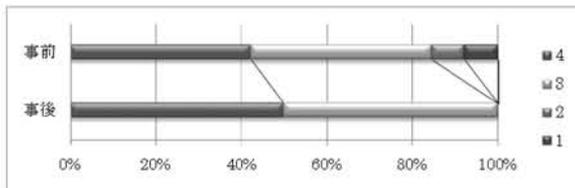


図2 これまでのクラスでの英語の授業は楽しかったですか。

（2）もっと英語を使えるようになりたいですか。

「よく当てはまる」という児童が1人減ったものの、「まあ当てはまる」の児童が増え、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」と負の評価をする児童がいなくなった（図3 参照）。

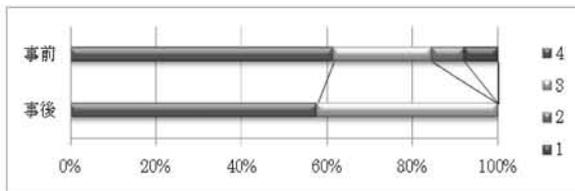


図3 もっと英語を使えるようになりたいですか。

（3）「～できる」という英語での表現の仕方を知っていますか。またそれを使って発表できますか。

単元学習前は、ほとんどの児童が「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」であったものが、学習後では「よく当てはまる」「まあ当てはまる」に移行している（図4 参照）。

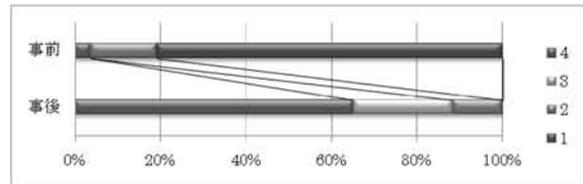


図4 「～できる」という英語での表現の仕方を知っていますか。またそれを使って発表できますか。

「自尊感情」に関して

（4）自分には、よいところがあると思いますか。

「あまり当てはまらない」が減り、「よく当てはまる」と「まあ当てはまる」という回答が増えた。（図5 参照）。しかし、「全く当てはまらない」とする児童は、事前・事後ともに3名で、それぞれが同じ児童であった。今後とも、いろいろな機会を設定して、自分に自信をもつことができるような取り組みを重ねていきたい。

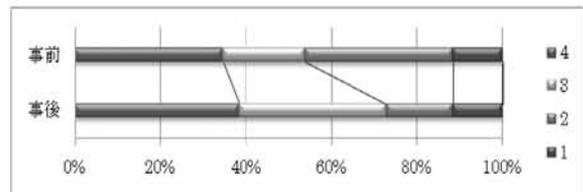


図5 自分には、よいところがあると思いますか。

6. まとめ

今回の実践では、外国語活動の目標とともに、外国語活動と道徳、理科などの教科・領域横断的な指導を行いながら、学校・学級目標を達成させることをねらいとした。その際、自分のことを見つめ直し、自身のことを伝える自己表現をすること、また、友達のことを再発見し、理解しようとすることで、コミュニケーションの質を高めることを試みた。

それらについて、児童の感想やアンケート結果から成果と課題を以下に述べることにする。

成果

- 外国語活動に意欲的に参加し、「もっと英語を使えるようになりたい」という児童が増えた。（関心・意欲・態度）
- “can”「できる」という英語の表現を知り、自分のできることを紹介することができた。その際、「与えられた選択肢から選んで文を作るような機械的な発話」としてではなく、自分が伝えたい事を表現することができた。（技能・表現）そのことから、「コミュニケーション能力の素地」を育成することにつながる活動ができたと考えられる。
- 「自分にはよいところがあると思う」とする児

童が増えた。

- ・ 児童の感想から、外国語活動、及び教科・領域横断的な取り組みにより、自分や友達の良いところに気付き、尊重しようとする意識を持ち、コミュニケーションの質を高める機会になったと思われる。

課題

- ・ 自己紹介で、「自分ができること」を少なくとも一つは表現しようとするねらいには到達することはできたが、“can”を使つての英語表現が限られていたため、単元の目標に設定していた「慣れ親しむ」までには達することができなかった。「自分らしさ」を豊かに表現するためにも内容を充実させる必要がある。
- ・ 「言葉の面白さや豊かさに気付く（言語や文化への気づき）」という目標を設定し、ある程度は到達することができたが、十分であったとは言えない。目標に達成するためには、外国語の音声に触れる時間を増やす必要があると思われる。

今後とも小学校外国語活動を充実させるために考慮すべき観点を基にして、カリキュラム開発や授業づくりについて検討していきたい。

7. 謝辞

本研究を進めるにあたり、奈良教育大学教職大学

院の先生方には、ご多忙の中、終始丁寧なご指導をいただきました。特に吉村雅仁教授には、学校実践や課題研究の充実に向けて2年間にわたってご指導をいただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

註

- 1) 金森強 (2009) 「第2部 実践—何をどう進めるか—」岡秀夫・金森強編著『小学校英語教育の進め方—ことばの教育として—』成美堂, 84
- 2) 高知県教育センター (2005) 子どもの自尊感情をはぐくむ学校についての—考察 3, 平成 17 年度 紀要, 42
- 3) 河内和子 (2003) 自信力はどう育つか—思春期の子ども世界4都市調査からの提言. 朝日新聞社, 81-82
- 4) 遠藤辰雄 (1992) 第1章 セルフ・エスティーム研究の視座, 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編『セルフ・エスティームの心理学』, ナカニシヤ出版, 8-25
- 5) Rosenberg, M. (1965) Society and the Adolescent Self-image. *Princeton Univ. Press*. pp. 30-31
- 6) スーザン・ファウンテン(1996) *Leaning Together* 『いっしょに学ぼう』, 国際理解教育センター, 10-24

参考文献

- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領。
文部科学省 (2009) 英語ノート
文部科学省 (2009) 英語ノート指導資料